

處女懷胎

石川淳

處女懷胎

昭和二十三年二月十日 初版印刷
昭和二十三年二月二十日 初版發行

定價 百圓

著者 石川 淳

發行者 角川 源義

印刷者 牧 恒 夫

株式會社 大化堂

東京都西多摩郡澁村根ヶ布三八五

發行所

角川書店

東京都千代田區麹町代官町二
出協會員番號A二一〇〇二

石川 淳

處女懷胎

角川書店

目次

雪のイヴ

五

しのぶ戀

四五

處女懷胎

八七

雪のイヴ

川越圖書館

昭和二十二年五月作

ことしはひどく寒いだらうとまへぶれのあつた冬が存外あたたかく、二月に入つて十日ばかり春近い日和がつづいたが、それがけふになつて、急にぐつと冷えこんで來て、夕方の空模様あやしく、雲ひくく垂れて、ここ有樂町の電車道に掛けわたした省線のガードの、鐵のとどろきと巷のはこりとに鍛えられたやつが、北風に吹きさらされながら、雲の重みの下にたわむまでに凍えた。このガードの下は、晴れた日でさえいつもうす暗く、じめじめして、うつかり通りかかるとあたまの上から何やらえたいの知れぬ水がぼたぼた落ちて來て、鋪道の隅にはまた尿くさい水がたまり、紙屑がたまり、さらに人間までそこにたまつて、ずらりと泥をかぶつた灰色の一行は靴直し靴みがき、食らひつくやうな眼を光らしながら、中腰の姿勢で行人の足もとを狙つてゐる。けふは常よりもなほ暗く、風さむく、ひとの出足もにぶいのに、この灰色の一行

はあひかはらず、背後の煤けた壁に沁みついたけしきで、これぎりの生き場所の、おのれの持場から去らうとはしない。その列のまへに立つて、さきに立つてゐるひとびとの中にまじつて、今あいたばかりのみがき臺の上に片足を載せると、そこに顔を伏せてうづくまつてゐたのがすぐ刷毛をとつて、泥靴をこすりはじめたが、かへつて泥が靴の皮に擦りこまれるやうなぐあひで、足指のさきに刷毛の目が荒くこたへた。

すぐ向うに、廣い道幅ひとつへだてて、大きな建物が立つてゐる。見世物小屋である。ときに、ちようど入替りの刻限と見えて、小屋の前にはかにさわがしく、中からどつと押し出されて來た人波が街路にあふれて、どよめきながら四方に散つて行つたが、その一むれがガード下の道にもながれて來た。まつさきに二人づれの若い女の、赤い花模様のきれをあたまからすつぽりかぶつたのが、だいぶくたびれた短い外套をやけに肩でゆりあげながら、いそぎ足で靴みがきの列のまへを行きすぎようとするうしろから、これも女ばかり五六人、年頃も風態も似かよつたのが、追ひかけるやうにして、何やらけしきばんだ調子あらく、

「ねえさん、ちよつとお待ちよ。」

くりかへして聲をかけられて、ふり向いたさきの二人を、ぐるりととりかこむ形で、顔と顔まぢかに詰め寄りながら、

「あんたたち、どつから來たのさ。」

二人づれの、どちらも見るからに鼻柱の低くふてぶてしいのが、いつそ居直つたけ
はいで、

「どつから來たつていいぢやないか。よけいなお世話だよ。」

たちまち殺氣立つた五六人の一組が、

「なまいきいつてやがら。ここをどこだとおもつてゐるんだい。ラク町だよ。ブクロ
(池袋)あたりをうろついてゐるのたちがふんだよ。あんたたち、どつから來たんだか
知らないけど、このへんにまぎれこんで來てへんなまねされちや、ラク町の顔にかか
はら。」

「へんなまねつて、何したつてえのさ。」

「泥棒したぢやないか。」

「なんだつて。」

「こないだ、ここでお客をひろつて行つて、品川の宿屋で五千圓盗んだのは、あんなたちぢやないか。ちやんと判つてゐるんだよ。ラク町にや、そんなことするのはひとりもゐないんだからね。」

「盗んだんぢやないよ。もらつたんだよ。お客からお金とるの、あたりまへぢやないか。なんだい、ラク町ラク町つて。あんたたちだつてパンパンのくせにさ。」

そばを通りかかりのもの、靴をみがかせてゐたもの、靴みがきまでがちよつと手を止めて、みなめづらしげに、事あれかしといふ顔つきで、このいさかひを眺めてゐたが、そのとき、すでにみがきをへた靴の右足をおろして、代りに左足を載せかけたみがき臺の、ついその向う、眼の下の地べたから、いきなり疳高い叫びがあがつた。

「のしちやへ、のしちやへ。」

たしかに、靴みがきにはちがひない。しかし、あやめも判らぬよごれた布きれで頬

かぶりして、仕事服の、泥と靴墨とでどす黒くなつたやつをだぶだぶに著て、夕ぐれ
の道ばたにうつむきの姿勢でゐるのだから、年のころ面體など見定めがたく、男とも
女とも氣にとめずにゐたのに、今ばつと立ちあがつたそのすがたの、刷毛を手につか
んだまま、すさまじくあらくれないながら、しせん若い女のしなやかさで、だぶだぶの仕
事服が肩からずれかかつて、ぼたんのとれてゐる胸もとに色あざやかな眞赤なセータ
ー、乳房の形がうかがへるまでにむつくり盛り上つて、はだかつた襟の、頸筋あらは
に白く、そこにちよつと靴墨のはねの附いてゐるのがいつそなまめかしかつた。もつ
とも、ずばんは男物の、これもだぶだぶの茶褐色のやつで、靴はゴム靴のぼつてりし
たのを、踵からく踏んですすみ出て、いさかひのまん中に割つて入ると、二人づれの
はうに向つて、噛みつくやうに、

「バンバンだつて。何いつてやがんだい。バンバンならどうしたつてんだい。男が
みんな、いくぢがないから、あたしたちがはたらいてるんぢやないか。バンバンと泥
棒とはちがふんだよ。おまへたちみたいに、泥棒だなんて、古いんだよ。氣をつけろ

よ。」

いつかひとだかりがして、まはりに立ちどまつた見物の中から、ようようとか、やれやれとか、懸聲さわがしくなつたのに、二人づれのはうは長居はおそれと覺つてか、あとずさりに二言三言、何やらすてせりふをのこしながら、夕闇をいいしほに、ひとごみにまぎれて逃げるやうにすがたを消したあとに、五六人の一組、これは勝ちほこつたていで、逃げる敵を追ひかけようとまではせず、なほも口うるさくがやがや、もと來た道に引揚げかかつたが、その中にまじつて、れいの靴みがきの女が肩をそびやかして、仲間の先棒を振つた形で、ともに喋りあひながらどこやらへ引揚げて行きさうに見えた。

こちらは靴の右足だけはびかびか光つたが、左足は泥のままなので、「おいおい」と呼びとめると、「え」とふり返つたのに、

「靴が半分のこつてゐる。」

「あ、さうさう。」

「商賣をわすれたか。もつとも、こつちのはうは副業らしいが。」

「今みがいたげるわよ。」

まだ手にぶらさげてゐる刷毛を振りまはしながら、もとの位置にさつと跳ねかへつて来て、それでも殊勝らしく、いそいで靴をみがきにかかった。見おろしたところ、十八九ぐらゐの年ごろだらう。おもひなしか、泥をかぶつたいでたちにも甘酸っぱい肢體の精氣がにじみ出てゐて、今はすり落ちたかぶりものの下に、仕事服がまくれて、猪首と見えるまでにふとりじしの、油の浮いた襟あしが背中につづくあたりにもにくからず、刷毛をもつ手のうごくにつれて、その襟あしから眞赤なセーターの肩にかけて肉のふるへるけしきは、とても色つぽいなどといふ時勢おくれの齒がゆいふせいではなく、御方便なものでただちに當世好みの劣情露骨な繪様を呈してゐて、うすぎたないところこそかへつて今人には花なのだらう。

「とんだ手數をかけちやつたな。いそがしいところを。」

「どういたしまして、商賣でございます。」

「本職のはうはどうだね。立入禁止で、われわれおことわりかね。」

「一人前の口きいてら。こんなぼろ靴はいてるくせに。」

「あたらしい靴がほしいんだが、ちかごろまた靴が見えなくなつたやうだ。」

「あるわよ。千二百圓出せば賣つたげるわ。」

「その金でビールでものまう。」

「いつしよにのまうつていふ話。」

「さつそく本性をあらはして來たな。」

「ふん。」

みがきをはつて、十圓札を出すと、だまつてポケットにねちこんで、あたりを憚かつてか、ちよつと聲をひそめて、

「ねえ、ほんとにビールのむ。」

「靴すり合ふ縁だ。なんなら附合つてもいいさ。」

「ぢや、待つてよ。」

「どこで。」

「數寄屋橋の小公園の入口のところで。すぐ行くわ。もう店しまふから。」

一しきりぴゆつと地を拂つた暗い風に吹きまくられて、はらはらと、人間も露店もひとしく巷のはこりの中に散りみだれて行くのに、襟さむく、足もとから逐ひたてられて、いそいでわたつた橋のかなた、小公園の入口のまへ、その柵にもたれて、鋪道を低く舞つて來た新聞紙の靴にからまるのを踏みのけながら、敵の來るにもせよ來ないにもせよ、ともあれ風のとぎれたすきにマツチをすつてたばこに火をつけた。

まのあたりの町のけしき、道路にも電車にもひとが湧いたやうに群れてゐるのは勤めの引ける時刻だからだらう。その雜鬧の中を突つ切つて、風とともにうなりながら、トラックが通る。それが二臺三臺とつづいて通る。トラックに乗つてゐるのは鼻息の荒い可憐なる青春である。けだし、ガード下の淑女のよき友だらう。國の盛衰のごとき、たかが歴史上の一時の流行などはよそに見て、たをやめはつねに盡きず、ますらをはあらたに興つて、さつそくおほつびらにべたべたの附合は、何よりありがたいと